

フイヒテの知識學に關する一考察

河 瀨 憲 次

四

既に前節に述べた如く、フイヒテの知識學に於て理論我の問題に關する限りは、其の説明の根據をば、夫の生産的構想力と呼ばれるところの無意識的な精神能力に求めなければならぬ。併しながらかくの如き絶對我の有する自由なる自己限定といふことは、限定といふ概念の意味の上からして、單に絶對我なる唯一の原理によつて成り立ち得ると見ることはできない。何等かの意味に於て其れに對應する原理を必要とする。於此、障礙 *Ansos* といふ概念こそは、かくの如き原理として要請せられたるものであると解しなければならぬであらう。尤も嚮にも説いたごとくフイヒテ本來の立場からしては、かゝる反對の原理として考へらるべき *Ansos* の概念に、積極的の意味を與へることは避けなければならぬことであり、事實、單に絶對我に自由

なる自己限定といふ課題を與へるに過ぎないものと考へられて居る。(Grundl. d. es. W-L, S. 130)

此の意味は取りも直さず自我に對し其の障碍たるものが全然異種的事ではなくして自我化の途上に立つものであり、所詮自我化せらるべきものであるといふ意に他ならない。がさればといつて自我化せらるべきものであるといふことは、謂ふまでもなく、未だ自我化せられないあるものがあること云ふことに他ならないとするならば、縱令 *Autos* の概念が消極的の意味しかも得ないものとしても、言ひ換へれば其の内容の上からしては自我と同種のものとしても、他方何等かの意味に於ては、即ち其の形式的の面に於ては、少くとも異種的な或るものを必ずや許さなければならぬこととなるであらう。此の意味に於て知識學の理論的部門に關する限り、障碍なる概念はまた積極の意味をも持つて居ると謂ふことができる。理論我は飽くまでもかゝる障碍なる概念に依存して始めて可能であり、従つて有限的相對的であると考へなければならぬ。而して此のことは理論的部門の原理として考へられた *Das Ich setzt sich als bestimmt durch das Nicht-Ich.* といふ命題の自らなる展開の結果と斷じ得るでもあらう。

之を要するに前號に於ける歸結が示すごとく、非我としての物自體の問題は、フイヒテの知識學に於ても理論我に關する限りは、依然として積極的な意味を以て臨んで居ると同時に、此に理論我たる相對的有限的な自我と、知識學の絕對原理 *schlechthin unbedingter Grundsatz* として考へられた絕對我との間に、自我の自同性を保たしめる以上は、必然に解決されなければならぬ問題が新らしく現はれてくる。言ひ換へれば障礙其のものが、全く絕對我によつて定立せられるものであることを明にする必要があり、茲に嚮にも謂つたごとき實踐我への轉向ともなり、實踐的觀念論として知識學が其の本質を展開するに到るものであることも周く知られて居ることである。

ただ、私が當面の問題として提供せんとするのは、いま實踐我によつて障礙の概念に積極的な意味を與へ得、従つて相對的な理論我を基礎附けることができるごときも、果して實踐我其のものが單に絕對我の自らなる現れとしてののみ充分に考へ得るであらうかと謂ふことである。實踐我の本質を、考へらるるごとき *Strichen* といふことにあるごとするならば、而して *Strichen* は必然的に要求の概念を豫想するものごとするならば、かくの如き *Strichen* 或は要求の概念が單に絕對我の概念よりしてのみ、完全に

演繹し得られるであらうかが問題でなければならぬ。要約するならば、其の本質を *Streben* といふことにもつて居るところの實踐我の概念を、絶對我から導出するに當つても依然非我の問題が、不可避的に横つて居るのではなからうかと謂ふことである。

フイヒテに依つて爲された *Streben* の、従つては其の豫想たる要求の概念の演繹に二種類ある。其の一つは彼の所謂 *apagogisch* に導き出されたものである。即ち既に述べた如く *Intelligenz* としての有限的な自我と、知識學の出發點としての絶對我とが等しく自我であり得るためには、前者は少くとも後者によつて基礎づけられたものであることを要する。然るに理論我は上の如く直接には障碍の概念に依存するが故に、かゝる障碍其のものが絶對我によつてのみ定立せられるといふことから始めて間接に、嚮の理論我絶對我の關係が規定せられることができる。要するに障碍としての非我が絶對我の作用の結果であると言ふことは、自我の自同性の保持といふことに取つては、缺くべからざる豫想であり、不可避的の要求でなければならぬ。今この豫想たり要求たる命題の意味を、更に深く考覈することによつて自我の本性に關する重要な概念を、論理的に展開することができる。

前の命題、自我は非我を定立するといふ意味は、一面自己を制限することであり、絶對我の概念と矛盾する。即ち自我を以て同一の意味に於て、同時に有限と見、無限と解することは明に自家撞着たるを免れない。従つて此の矛盾を脱してしかも嚮の命題を生かし得るためには、自我を以てある意味に於ては無限であるが、他の意味に於ては有限であると觀なければならぬ。自我の作用が自我自らに嚮ふ場合、自我が自らに歸り行く時、其は自我の純粹活動として無限ではあるが、もし非我に嚮ふならば、其は自我の客觀的活動として明に有限である。然るに無限なる活動も有限なる活動も等しく共に自我の活動なる點に於て、兩者の間に *Beziehunggrund* が成り立ち得後者を以て前者のある特定の活動 *eine gewisse bestimmte Tätigkeit* として考へさせる。

翻つて理論的部門に於て考察した如く、障礙といふ概念は其れに對する作用を俟つて始めて障礙たり得るものであり、且つ此の場合對象として考へ得るとするならば (*Der Gegenstand wird bloss gesetzt, insofern er Tätigkeit des Ich widerstanden wird; keine solche Tätigkeit des Ich, kein Gegenstand. - Grundl. d. g. W-L. S. 178*) 先づ自我の客觀的活動を通じて更に自我の純粹活動を以て、一切對象の根基であると謂ふことができ、此に前に掲揚した要求が滿されることとなる。

今問題となるのはかくの如き仲介者たる自我の客觀的活動とは如何なるものであるかといふことでなければならぬ。

考へ得るごとく客觀的活動は其れが活動である限り、自我の活動であり、既にも述べた如く自我の純粹活動に基かねばならぬ。と同時に、他方それが客觀的たる限り自我との關係の上に立つものであらねばならぬ。於此自我と自我との間に關係の存在が許されるには兩者の間に、*Beziehungsgrund*の存立を必要とする。此のことは言ひ換へれば自我と自我とは相等しいといふことを立てることを意味する。然るに兩者は現實には全然相對立するものなる以上しかも自我の客觀的活動が許されなければならぬ限り、先づ兩者は互に等しかるべきもの、互に一致すべきものとして考へられなければならぬ。現實に等しからざる二つのものが一致すべきものとせられるならば、茲に自我が自我に一致すべきか、或は自我が自我に一致すべきかの何れかであらう。而して知識學の根本豫想として、自我こそは絶對的に獨立であり、従つて自餘一切は全然自我に依存すべきもの、一切は自我に於て定立せらるべきものであるが故に、自我を擧げて悉く自我に一致すべきものとする他はない。茲に理想としての、要求としての自我の絶對性を考へることが出来るやうになる。

「絶對我は schlechthin に非我に關係する」といふ命題は正にかゝる要求を示すものである。従つて此の命題中の非我の概念も、其の形式に於て即ち一般に自我以外のものといふ意味に於ては非我であるけれども、其の内容に關しては自我と等しかるべきものとして全然の非我を意味するものではない。さりながら内容は別として、兎に角形式的とは謂へ非我として、自我とは異種的なものに絶對我が關係する場合、其が現實に非我を規定し盡くすことは不可能であり、此の意味に於て wirkliche Kausalität を缺いで居ると謂はなければならぬ。

今や現實になし得ず、有し得ないが故にここになさんとし、獲んとする飽くなき努力と要求とが生れるとするならば、寔に絶對我の非我に對する關係即ち自我の客觀的活動とは、取りも直らず eine Tendenz, ein Streben zur Beziehung であるを謂ひ得るであらう。Die reine in sich selbst zurückgehende Tätigkeit des Ich ist in Beziehung auf ein möglichen Object ein Streben; und zwar, laut obigen Beweise, ein unendliches Streben. (S. 180) 繼こ „Keine solche Tätigkeit des Ich, kein Gegenstand.“ を謂つたことは之を改めて、„Kein Streben, kein Objekt.“ (S. 180) を謂ひ換へられる。

かくの如き Streben の豫想となるものは取りも直らず前述の要求——一切の實在

を擧げて自我に一致せしめんとする要求であり、是こそは正當に實踐理性の要求と呼べるべきものである。かくて實踐理性の有する要求及び其れに基く無限の *Streben*、一言すれば理性の實踐的能力は、一つに夫の自我の客觀的活動を意味するものであり、此は更に自我の自同性の保持といふことに對して、必然的の制約なるを思ふ時、茲に吾々は理性の有する實踐的能力の絶對自我の概念より論證し得たとしなければならぬ。

他方かく論證せられた *Streben* が必然に無限であるといふことは、謂ふまでもなく自我の無限なる客觀的活動を立することゝ同一である。然るに *Intelligenz* として考へらるべき客觀的活動は有限的でなければならぬとするならば、等しき自我の客觀的活動の一つは無限、他は有限として考へられるに到る。此は何を意味するのであらうか。

前號に於て觀たごとく、*Intelligenz* として自我の活動は常に非我の活動と *Wechselwirkung* の關係に立つて居る。此のことは必然に非我の積極的活動を前提とすることであり、非我は *ein wirkliches Objekt* として考へられるものでなければならぬ。さればこそ意識の法則たる „*Kein Subjekt, kein Objekt; kein Objekt, kein Subjekt.*“ が意味をもち

得るのである。之に反し *Streben* としての自我の活動は其の本質上非我に凝滞するものでなく、却つて絶對我の飽くなき自己實現の要求に基いて非我を觀る。かくの如き滿さるるを知らざる欲求と努力とに現前する非我の世界が、夫の *eine wirkliche Welt* とは異つて自我の絶對性の許容さるゝ世界、取りも直さず *eine ideale Welt* たるは自明的といふことができるであらう。

要するに非我の世界が現實的と解せられるか、他方理想的に見らるゝかによつて、自ら自我の活動も亦有限とせられるか、はた無限と考へらるゝかの別を生ずるのである。唯縱令、無限とせられる場合にあつても何等かの意味に於て、非我の世界と關係するといふ點に於て、*Streben* は自我の純粹活動に對し當然正反對の方向に立つものであり、此の意味に於て有限的とも謂はるべきものである。有限なればこそ無限、無限なればこそ有限とは眞に *Streben* の本質を、やがてまた人間精神の本質を語る矛盾であり、到底神の與り知らざるところである。此の矛盾を脱して眞の絶對我に歸するの唯々非我への關係を完了することであり、取りも直さず無限の完成 *eine vollendete Unendlichkeit* を許るすことによつてである。所詮は *Streben* 其のものゝ自滅と謂はなければならぬ。唯飽くなき努力の理念としてかゝる絶對無限の自我は、實

踐我に對し、積極的の意味を持つて居る。

以上粗笨ながら、*フイヒテ*に由つてなされた *Streben* 並に其の豫想たる要求の概念の演繹中 *apagogisch* とせられたものに就いて其の大意を叙述した。茲に於ては、明に認め得るごとく夫の自我の客觀的活動と呼ばれるものを深く探りゆくことによつて、自ら *Streben* の概念に達したのである。而して知らるゝごとく自我の客觀的活動は其の純粹活動と全然方向を異にせるもの、必ず非我との關係を含んで居るものであるとするならば、*Streben* の演繹に當つて既に非我が缺くべからざる役目を負うて居ることも當然すぎると謂はなければならぬ。

*フイヒテ*が獨り其の知識學に於て、始めて理性の實踐的能力を論證し得たとするのは、唯かゝる客觀的活動の想定は前述のごとく自我の自同性の保持に對して不可避的のものであり、しかも自我の自同性の保持といふことは、絕對我の必然的なる要求であることにより、逆に實踐理性其のものが、絕對我の必然的なる要求に基くもの、言ひ換へれば *Streben* をば、絕對我より演繹し得るとする意味に他ならない。即ち

Streben そのものゝ演繹は自我の自同性の保持といふことを介してなされたものであり、此の意味に於て *apagogisch* と呼ばれたものである。此の場合、自我の自同性の保

持といふことが問題となつたのは、無限なる絶對我と有限なる理論我との對立が現前したが故であるとするならば、少くとも此の問題に於て理論我の有限性といふことが、問題構成の缺くべからざる契機をなして居るといふことができる。従つて此の問題を介しての演繹に於いて、非我が重要な役目を有することも亦自ら明なるとともに、演繹された當の *Subjekt* が何等かの意味に於いて非我に制約せらるべきものであることも認めなければならぬ。このことはフイヒテ自らによつても明言せられて居る。Also ein *Streben*, das, *inwiefern es dies ist, auch mit durch ein Nicht-Ich bedingt wird.* (S. 189)

五

フイヒテによつて試られた今一つのは、直接に且つは *genetisch* に、絶對我の本質もしくは法則より、*Streben* 及び其の豫想たる要求の概念を演繹する事であつた。絶對我は謂ふまでもなく純粹事行として、其の本質は、*Das Ich setzt sich selbst schlecht hin.* といふ命題によつて意味せられるところの、自我の純粹活動に存する。即ち絶對我にあつては活動としての自我も、働かるゝ實在としての自我も、全然同一なる

もの言ひ換へれば同一なる自我が二個の立場より考察され得ることは夫の知的直観の明に示すところである。此の意味に於て絶對我たる限り、實在としての自我は ein unendliches Quantum, ein die Unendlichkeit ausfüllendes Quantum として考へらるべきものであり、謂ふまでもなく自我に於ける一切は相等しく、到底自我に異種的なものは立せらるべくもない。他面自己反省といふとは自我の法則である。 Da Ich setzt sich selbst schlechthin, 同時に Das Ich setzt sich, als durch sich selbst gesetzt, も亦自我の本質でなければならぬ。今前の setzen を ursprünglich とするならば、かくの如き本源の定立に對し後の setzen は正に現實意識の事實を語るものとして考へられなければならぬであらう。然るに現實なる意識の可能なる限り、かくる意識の事實に現はるゝ自我、反省の對象としての自我は、到底知的直観の對象たる絶對我と同一たることはできない。何等かの意味に於て限定されたもの、無限に進みゆく活動の、障碍によつて阻まるるもの下なければならぬ。如何にして然るかは、單に自我の概念のみからしては到底導き得べくもない。吾々は唯々現實意識の可能なる以上、其の事實を承認しなければならぬに止る。かくの如く阻まれたる自我の活動は, zurückgetrieben として eingeschränkt として考へられる。於此嚮の ein die Unendlichkeit ausfüllendes Quantum として

の自我と現實の eingeschränktes Ich とを對照することによつて、前者は後者の止み難き要求として、後者の飽くなき努力の對象として現前するに到る。無限に進みゆく活動を自我活動の遠心的方向とするならば、阻止せられた活動は正に自我活動の求心的方向として見られる。等しく自我の活動たることによつて兩者共に自我に歸せられると同時に、各々方向を異にする點に於て、茲に自我自らの本性に基いて、自らの裡に異質的なもの、異種的なものを持して居ると謂ふことができる。取りも直さず茲に非我への諸々の關係を展開すべき要諦が、自我自らの裡に已に包藏せられて居る。之を要するに要求の概念、更には其に基く飽くなき Streben を、一つの自我の本質並に其の法則より geneitsch に、直接に導き得るとしななければならぬ。

今フイヒテによつてなされた Streben に關する此の種の演繹にあつて、到底見逃し得ないことは、„Das Ich setzt sich selbst schlechthin.“ に對する „Das Ich setzt sich, als durch sich selbst gesetzt.“ と謂ふことである。嚮の本源の定立が自我の本質として單に自我の原理のみによつて考へ得るは謂ふまでもないとしても、後の定立を以て同様に單に自我の原理のみによつて考へられるものであると謂ふことはできない。此の場合にあつては現實意識の事實を語るものとして、既にも説いたごとく何等かの意味に於

て、制限された自我であり、従つて非我にも其の原理を求めなければならぬ。而して此のことは自我の法則たる自己反省から *Streben* を派出するに當つては、既に非我が缺くべからざるものとなつて居ることを有力に意味するものであると斷じ得るであらう。

思ふに *Streben* 演繹に際して其の直接たるを間接たるに論無く、單に絶對我の唯一原理のみによつては到底果し得ないと謂ふ他はない。事實このことが、明にフィヒテ自らの認知するところであつたことは、第一の演繹に於て自我の純粹活動が客觀と關係する以上は *Streben* として考へられなければならぬが、一般に自我の純粹活動が客觀に關係するといふそのこと理由は何等純粹活動自體の裡に存するものではないと謂ひ、(class überhaupt die reine Tätigkeit in Beziehung auf ein Objekt gesetzt wird, davon liegt der Grund nicht in der reinen Tätigkeit an sich; aber, wenn sie so gesetzt wird, sie als ein *Streben* gesetzt wird, davon liegt in ihr der Grund. S. 182) 或は第二の演繹に於て、絶對我の自己制限を以て到底單に自我のみからは導き出すことのできないもの(S. 194) 従つて現實なる意識の事實は、決して a priori に論證さるべきものでないと觀たことによつても確實に窺知し得る。客觀 *Objekt* として有する種々なる規定は、自我によつて、自我の法

則に因つて可能となるでもあらうが、一切の規定を抽象し去つた最後のものに到つては、自我の如何ともする能はざるものとして、全然自我に對立する原理でなければならぬ。一切の生命、一切の意識の原理は、夫れ等の可能となる根據は、自我の裡に藏せられてゐるであらう。唯現實なる生命、現實なる意識の可能なるためには、必ずや他の原理との相尅を要しなければならぬ。更に一步を進めて、其の存立を活動にもつて居る自我は、正に活動の制約として對立せる原理を必要とする以上、かかる原理に依存するものと謂はなければならぬであらう。フイヒテも次の如く述べて明に此のことを認めて居る。Das Ich ist demnach abhängig seinem Dasein nach; aber es ist schlechthin unabhängig in den Bestimmungen dieses seines Daseins. (S. 198) 茲に知識學の限界がある。

即ち知識學は理論我及び實踐我の成立に關して、一言すれば經驗の成立に關しては何等かの意味に於て、自我に對立すべき原理の想定及び對立する二個の原理の相尅を俟つて充全たることができる。併しながらかく對立する原理の間に關係の存在を許すには、取りも直さず Satz von Grund に従つて Beziehunggrund が立せられなければならぬ。と同時に更に此は亦同様の要求によつて Unterscheidunggrund をも必要とする。而して更に此は Beziehunggrund を求め、かくて永遠に窮達するところなきもの

である。Realität 及び Identität を Identität は Realität を前提としなければならぬ。於此知識學の究極するところは自我對非我に關する免るべからざる *Nihil* である。フイヒテは單に知識學の限界を認容して經驗の説明に關する限り、非我の想定之餘儀なきを許しかくて *realistisch* の見解の避くべからざるを説く以上に、尙竿頭一步を進めてかかる非我の想定 of 必然的歸結としての、避くべからざる *Nihil* の承認を以て、其の知識學の特質とさへもなして居る。即ち彼に従へばかくの如き *Nihil* を無視するところに獨斷的觀念論があり得ると同時に、かくの如き *Nihil* を超えんとするところに超越的實在論的獨斷論が成り立つ。(S. 198)之に反して有限なる人間精神に取つて到底踰え得ざる *Nihil* の存在を承認して前二者の中間を辿る知識學こそは、眞の批判的觀念論として正に *Real-Idealismus* 或は *Ideal-Realismus* とも呼び得るものであるとする。

嚮に理論我に於て解き得べくもなかつた非我の問題は、無限なる *Subjekt* としての實踐我にあつても抑々實踐我其のものを基礎づける當のものとして、到底實踐我によつては解き得ないもの、實踐我の總じては有限なる人間精神の永遠に背負ふべき問題といふ他はない。

Wohler より *Wahrheit* への轉向は、夫れが新しく絶對我の理念を掲揚するものである

點に於て一切非我の自我化を促進するも、其の意味は非我の問題を解き了はるといふことではなく、寧ろ非我の問題を排除することに他ならぬ。特殊性の自らなる普遍との融合にあらずして、其の看過に過ぎない。具體化にあらずして抽象化である。單なる普遍主義は到底特殊の潑刺たる真相に徹することはできない。非我を豫想せざる絶対我は正に絶対の靜寂であり、やがては死でなければならぬであらう。フイヒテの理念としての絶対我の概念に關しては、かくの如き結論を容れ得る餘地が明に存して居ると私は思ふ。(Vgl. Zweite Einl. S. 100—102) 而してまた此のことが明に知識學の出發點としての、知的直觀の對象たる絶対我、即ち純粹事行の概念と矛盾するものであることも亦論を要しないであらう。動と靜、生と死。かくも根本的な對立が絶対我といふ同一の概念に與へられることは、單なる矛盾に陥らざる限り、絶対我に關して全然異なる二個の立場の存することを示唆するものであり、且つは是等の立場が夫れ夫れ知識學の出發點としての自我に、或は其の到達點として自我に相應するものであることを示してゐると思ふ。

フイヒテが其の「知識學の概念に就いて」の中に嚴密なる科學としての知識學に豫期した封鎖體系 *das verschlossene System* が、或る意味に於て實現せられて居ないと謂ひ

得るのも、かくの如き次序を異にせる二個の立場に未だ緊密なる内面的統一が與へられてゐなかつたに因るものとも考へ得るではなからうか。而して私が此に意味する二個の異なる立場とは、一つは神祕的立場を、他は批判的立場を指すのである。換言すれば直觀の立場に對する反省の立場であり、或る意味に於て *intuitiver Verstand* の立場に對する *discursiver Verstand* の立場とも謂ふことができるであらう。

私は最後に是等次序を互に異にせる二個の立場の何れもが、自我對非我の關係によつて規定せられるものであることを觀やうと思ふ。

六

絶對我が現實の自我に取つては一つの要求として、無限なる *Streben* を導く理念として即ち *eine vollendete Unendlichkeit* として考へらるべきことは既に説いたごとくであるとするならば、此の場合自我對非我の關係に、極限概念と其の *Reihenglieder* との間の關係を適用し得ることを容易に推測することができる。

通常考へらるゝごとく極限概念といふも種々の別あるであらうが、今自我對非我の問題に關して此に意味するのは、圓を以て其の内接及び外接多角形の極限である

と考ふる場合のごとく、其の *Reihenglieder* の個々が各々獨立して其の極限に向つて近くとするものである。

凡そ極限概念の特質として、極限を以て其の系列中の一個の *Glied* としても考へ得ると同時に、他方其の *Reihenglieder* の各々とは全然別個のものとしても考へられるものである。即ち系列の各成因に對して自らどの内面的連續性を要求するごともに他面それらの各成因に對して嚴乎たる超越性をも保持するものでもある。併しながらかくの如き特質が同一の意味に於て極限概念に屬するごとするならば、取りも直さず極限概念は自家撞着を含んで居るもの、従つて到底思惟し得ざるものと謂ふ他はない。私は茲に意味の上から *ideal* と *real* との區別を立することに依つて、此の矛盾を脱し得ると思ふ。

翻つて知識學に於ける夫の理念としての絶對我が、一方夫れが *real* の意味に於ては、即ち實現された理想として、*eine vollendete Unendlichkeit* としては、全然非我を絶したものでなければならぬが、他方 *idealisches* には寔に *Streben* の指導原理として飽くまで非我に對し、自らどの内面的連續性を要求するものであることを思ふ時、いかに絶對我の機構が極限概念の論構に髣髴たるかを、自ら觀取することができる。極限概念と

しての自我は、實踐的には一切の非我を以て自我化し得るものとして、理論的には一切の非合理性をして合理化せしめ得るものとして、取りも直さず一切の特殊性をして普遍化せしめ得るものとして考ふべき要求を意味して居る。かくの如き考は其の基礎として何等かの意味に於てライブニッツの連續律を偲ばしめるものがあり、フイヒテに於ける唯理論的考察の跡を物語るものと見得ないであらうか。事實、極限概念の論構は比量的悟性の基礎に立つて始めて可能であり、従つて理念としての絶對我に於ける自我と非我との統一に緊密なる内面性を缺ぐ所以も自明的である。と謂ひ得る。此の際明に非我は自我と對立せる原理として、自我の如何ともし難いものであり、かゝる絶對我によつては到底經驗の可能を先天的に演繹することは不可能である。Re-Idealismusなる最後の矛盾は、知識學が反省の立場に打ち立てられる限り免るべからざるものと斷じなければならぬ。非我としての物自體の問題は依然として殘されて居る。

今考察を轉じて知識學の出發點としての、知的直觀によつて端的に體驗せられるものとしての、夫の絶對我に就いて考察しやう。謂ふまでもなく、フイヒテによれば此は純粹事行として一切意識の根柢たり、生命の源泉たるもの、意識の背後にあつて

一切意識を可能ならしむる當のものである。かくの如き自我の純粹活動は、一切を産み出すものとして一切を裡に藏するものでなければならぬ。此の意味に於て眞に eine absolute Thesis と謂ふべきである。

此にあつては何等の對立もいまだ許されないと同時に、取りも直さず何もものも亦相等しともせられないものである。さればとて全然の空虚で有り得ないことの當然であるのは、フ、ヒテがかゝる Thesis を以て Antithesis 及び Synthesis の根據としたこと、従つてはまた知識學の第三原理が意味する Synthesis と區別して、此が Notwendigkeit, auf die bestimmte Art entgegenzusetzen und zu verbinden の基礎たるに對し、第一原理としての Thesis を以て Notwendigkeit, überhaupt zu verbinden とせるに依つて明であると謂はなければならぬ。

かく考へ來る時第一原理の意味する絶対我は取りも直さず das Ich + das Nicht-Ich の飽和的統一を示して居るものであり、此の點に於て正に神祕的立場を物語つて居るものと謂ひ得ないであらうか。第二原理及第三原理が共に何等かの意味に於て第一原理によつて制約せられると謂ふことは、やがて其れ等が第一原理を一步出ることの意味し、従つて das Ich + das Nicht-Ich の飽和的統一を破つて神祕的立場より反省

の立場への推移を語るものであると考へ得ないのであらうか。斯く解することによつて、第三原理の意味する Synthesis は反省の綜合となり、明に直観の夫れとは異なる。さればこそ既に述べたごとくフイヒテが第一原理と第三原理との間に、等しく綜合であつても嚴然たる區別の存することを説いた所以も充分に理會せられるのではなからうか。反省の綜合は謂ふまでもなく比量的悟性の綜合であり、自ら充全たり得ないものである。夫の第三原理の展開に基く知識學の歸結が、終にさくべからざる Zirkel に當面し、Real-Idealismus 或は Ideal-Realismus といふ免るべからざる矛盾に觸接するの止むを得ざる運命も所詮は自然といふほかない。

唯今かくフイヒテの純粹事行としての絶對我を解せんとするに當つて有力なる障碍と思はれるのは、フイヒテ自らがカント學徒に對する駁撃に於て其の知的直観を以て、單に批判的精神に牴觸せざるのみならず、却つてカントの意味する先驗統覺と同一であるとしたことである。即ちフイヒテ自ら自我の直接意識を意味することとせる知的直観を、敢て自我と非我との飽和的全體の直接意識であるとする。ことは曲解ではないかとの反駁である。之に對し、私はフイヒテによつて考へらるるごとく爾く兩者は全然の同一ではなく、カントの先驗統覺によつて意味さるる自我が

有であり、靜的なるに反して、フイヒテの知的直觀によつて意味さるる自我は飽くまで活動であり、動的であると説くことによつて自ら答へ得ると思ふ。加之、絶對我を以て *das Ich + das Nicht-Ich* と觀て始めて夫れが、カントに於ける如く經驗の相對的原理たるに止ることなく、更に其の絶對的原理として立せられた所以が明にせられると信ずる。

之を要するに非我は絶對我によつて決して生産せられるものではなく、却つて絶對我の本質を構成するに缺くべからざる契機であり、従つて *unab-leihar schlechthin* である。と謂はなければならぬ。唯上來明にし來つたごとく、純粹事行としての絶對我にあつては非我は内在的なるも、理念としての絶對我にあつては非我は全然超越的な位置にあるといふ差違が認められる。所詮何等かの意味に於て、非我に關する積極的考察が知識學の自らなる發展上當然なるべきことは、明白である。晩年に於ける知識學の變化は、正に問題の必然的なる展開といふことができるであらう。

神祕的立場と批判的立場、直觀と反省、形而上學と批判とが未だフイヒテの知識學に於ては充分なる體系に齎されてゐないことは、是を確認しなければならぬ。さわれ、既に、試みられたといふことは、形而上學に對しひたすらなる願望を有するも

のに取、何物にも換へ難い力と意味とを與へる。(完)